図書館資料展示（2015 年度）

西洋世界の辞書

西洋世界では辞書のような書物は紀元前より存在した。例えば、ギリシアではホメロスに出てくる難解な語を説明した難語辞典が必要とされ、古代ローマでは西洋最古の百科事典とされる大プリニウスによる『博物誌』が著されている。以降、学問的知識を集約した書物が、学者たちにとって不可欠な資料と見なされるようになる。

17 世紀後半、ヨーロッパでは啓蒙思想が広がり、知識を得て思考しようとする人々が現れた。出版の自由化が進んでいたイギリスでは、百科事典『サイクロピーディア』が出版され、知識欲・読書欲を満たした。これを受け、『百科全書』（フランス）・『ブリタニカ百科事典』（イギリス）も出版され、知識を体系化した百科事典事業は次々と成功を収めた。 同時代のイギリス社会では、書物が普及し、新聞や雑誌が創刊されるようになっていた。言葉の意味を調べる辞書に対する需要が日々高まり、それまでの難語のみを記した辞典ではなく、日常語も含んだ辞典が作られ始めた。1755 年に完成したサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』は現代の英語辞書につながるとされている。 20 世紀後半のコンピューターの普及に伴い、辞書が CD-ROM やソフトウェアで出回るようになるまで、辞書作りは西洋だけでなく日米でも活発に行われ、今日までに様々な辞書が出版されている。

（図は 18 世紀後半当時の西洋の地図:ブリタニカ百科事典初版の図版より）

立教大学図書館

＜参考資料＞

1. 『大英帝国の大事典作り』,本田毅彦,講談社,2005
2. 『英語辞書の変遷　英・米・日本を併せ見て』,小島義郎,研究社,1999
3. 『「編集知」の世紀』,寺田元一,日本評論社,2003
4. 『グリム兄弟　生涯・作品・時代』,ガブリエーレ・ザイツ,青土社,1999
5. 『百科全書　序論および代表項目』,桑原武夫訳篇,岩波文庫,1971
6. 『The Great EB : The Story of Encyclopaedia Britannica』,Herman Kogan,The University of Chicago Press,1958

展示資料について

①百科全書 / Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de letters

1751 年から 1780 年にかけて、フランスで出版された百科事典。イギリスで出版されたチェンバーズの『サイクロペディア』（1728 年）に影響を受け、イギリス人ミルズとドイツ人ゼリウスが、その訳稿を出版業者ル・ブルトンのところへ持ち込んだことが始まり。金銭上の問題で裁判沙汰となった後は、ルブトンが監修者としてディドロとダランベールが雇い、準備を進めた。当初は単なる翻訳書となる予定だったが、見識ある人々の論考を盛り込み、新たに編纂されることとなった。百科全書の編纂・執筆に従事した思想家や学者は「百科全書派」と呼ばれ、ジャン＝ジャック・ルソー、ヴォルテール、モンテスキューなどがいた。

②ブリタニカ百科事典 / The Encyclopædia Britannica

1768 年より現在に至るまで出版され続けている、英語の百科事典。フランスの『百科全書』に影響を受け、銅版画家アンドリュー・ベルと印刷業者コリン・マックファーカー、ウィリアム・スメリーによってエディンバラ（スコットランド）で制作が開始された。初版は 1768 年から 1771 年にかけて分冊形式で全 3 巻が出版された。ブリタニカ百科事典では主要な事項に関する詳細な「論説」と、語句に関する短い解説を記した「項目」で構成されていた。

第 3 版ではじめて国王に献呈され、アメリカに版権が移ってからは、アメリカ大統領にも献呈されている。第 9 版・11 版は学術的な評価が高く、それぞれ「学者のための版」「ブリタニカの頂点」と称される。第 15 版をもって印刷版の発行は終了しており、現在はオンライン版のみの展開となっている。

＜百科全書第 3 版＞

＜ブリタニカ百科事典第 3 版＞

③英語辞典 / A Dictionary of the English language

サミュエル・ジョンソンによる英英辞典。はじめて各単語について用例を集め、文脈の中での意味の違いから単語の意味を割り出した（帰納的語義記述法）。また、当時かなり揺れのあったスペリングの統一もはじめて試みた。チェスターフィールド伯が援助を断ったにも関わらず、辞書が完成する直前にジョンソン辞書をたたえる論文を雑誌に投稿したため、ジョンソンは「patron」の項目でこのことを皮肉っている。

PATRON：

1. One who countenances, support or protects. Commonly a wretch who supports with insolence, and is paid with flattery.

（恩恵を授け、援助し、あるいは保護する人。通例、傲慢さを以て援助し、その代償におべっかを言われる恥知らず）

④ドイツ語辞典 / Deutsches Wörterbuch

グリム童話で有名なグリム兄弟が編集者。「グリムの法則」と呼ばれる文法が採用されている。グリム兄弟は幼少のころから言語習得能力が優れており、若くして大学の研究者兼司書を任され、言語学研究に従事していた。編纂を開始したとき、兄弟はすでに 53 歳と 52 歳であり、ヴィルヘルム（弟）はＤまで、ヤーコプ（兄）はＦまでしか携わることができなかった。彼らの死後、多くの学者たちが事典制作に参加し、ドイツが東西に分離していた間も両国の研究者が共同で作業を続けた。

グリム兄弟が制作を発表してから約 110 年経った 1961 年にドイツ語辞典は完成した。1854 年に出版された第 1 巻の「序文」には 60 万の資料を提供した 83 人の協力者の名前が記載されており、彼らの中には友人や知人、かつての教え子、様々な分野の教授たち、牧師が含まれていた。

知識という夢 ―『ブリタニカ百科事典』に寄せて―

この小文を依頼されて『ブリタニカ百科事典』を改めて読んだ。この百科事典は現代世界で最も完全な、信頼できる内容を持つ百科事典であると言われる。だが読んでみて思ったのは、正直に言えば、「百科事典って何だろう？」ということである。第 15 版（2010 年）はマイクロペディア 12 巻、マクロペディア 17 巻、プロペディア（手引き）1 巻、索引 2 巻の合計 32 巻からなる。膨大な事典である。分量に圧倒されながらも、自分が関心を持っているいくつかの項目を調べてみた。そして「この事典は実際に役に立つのだろうか？」と思った。マイクロペディアは「簡潔な」百科事典である。項目は無記名である。だが明快で客観的な解説は小気味よく、レファレンスとして秀逸である。（項目によっては情報・データが古いものもあるが）対照的に、マクロペディアは「詳細な」百科事典である。すべて専門家が執筆し、多くの場合名前が記されている。だがこれはいったい何なのだろうか。網羅的な、興味深い記述ではあるが、かと言ってエッセーでも研究論文でもない。また項目の選別には編者の嗜好が、また記述には筆者の意見が強く反映しているようであった。

池袋図書館の The New encyclopædia Britannica 15 版から（所在:1F 西 参考図書）。1 巻(ﾏｲｸﾛﾍﾟﾃﾞｨｱ･赤),13 巻(ﾏｸﾛﾍﾟﾃﾞｨｱ･黒),ﾌﾟﾛﾍﾟﾃﾞｨｱ(緑),ｲﾝﾃﾞｯｸｽ(青)と背表紙の色が異なる

だがその後、百科事典の起源と目的、またその発展の歴史を調べてみて、以上の様な個人的感想が的外れであることがわかった。根本的な次元で大きな勘違いをしていたのである。何故なら百科事典とは調べるためのものではなく、読むためのものだからである。

「知は力なり」と言ったのはフランシス・ベーコンである。人間は知識によって進歩し、自然を征服することさえできる。この考えの根底にあるのは一種の「知識」信仰であろう。そしてその究極の形は「全知（全てを知る）」ということである。網羅的な知識の獲得への情熱と意志はすでに古代において存在した。例えばアリストテレスやプリニウスの著作に、また同様の著作はインドにも中国にも見られる。だが「全知」の希求が具体的に結晶するのは近代ヨーロッパにおいてである。先鞭をつけたのはフランスの百科全書派で、人間の知識の進歩の共有を目指して、18 世紀の半ばに膨大な『百科事典』の刊行を始める。この『百科事典』に刺激され、1768～1771 年にエディンバラで『ブリタニカ百科事典』が、また 1796～1808 年にはライプツィッヒで『ブロックハウス百科事典（初版）』が出版される。

思うに百科事典とは、人間の知的営為の達成を知識の集積として表現した文化的作品、あるいは宗教的作品なのであろう。『ブリタニカ百科事典』のプロペディアを読むと、この百科事典がある揺るぎない信念を持って出版されていることがわかる。それは古代ギリシャに端を発するリベラルアーツ（教養）教育に根ざしたもので、その中身は「知識という夢」とでも言えるものである。

（実松克義 本学名誉教授／元異文化コミュニケーション学部教授）